

防災問題における資料解析研究 (27)

河田恵昭・田中哮義・林 春男・北原昭男・高橋智幸

要 旨

巨大災害研究センターでは、所員それぞれの研究テーマ以外に、センター全体に関わる活動を継続し、研究成果のアカウンタビリティの向上に貢献している。本年は、1) 巨大災害研究センターセミナー、2) 地域防災計画実務者セミナー、3) 大規模災害対策セミナー、4) メモリアル・カンファレンス・イン・東京、神戸、5) セミナー「災害を観る」、6) データベース「SAIGAI」、7) トルコと台湾の地震被害調査について内容を紹介する。

キーワード：データベース、防災学、巨大災害、トルコ・コジャエリ地震、台湾集集地震

1. 巨大災害研究セミナーの開催

毎月、第1金曜日の午後、防災研究所内にてオープンセミナーを開催している。話題提供者は2名で、出席者は、毎回、当センターの関係教官をはじめ、学生のほか所内のほかのセンター、部門の教官などであり、活発な議論を重ねている。開催日時と講演者名及びタイトルは、以下の通りである。

・第1回 5月7日

河田恵昭(教授)

「アクセプタブルリスクについて」

田中哮義(教授)

「性能的防火基準とリスクの観点」

・第2回 6月4日

林 春男(教授)

「“Digital City for Disaster Reduction” 構想」

赤松純平(助教授)

「表層地質の地震動特性への影響－基盤構造と地震波減衰－」

・第3回 7月2日

今村文彦(客員助教授・東北大学工学研究科)

「津波情報と避難行動」

隅野哲郎(非常勤講師・大阪ガスエネルギー文化研究所)

「ゲニウスロキ・都市形成史とそのイメージ」

・第4回 9月3日

横田冬彦(客員教授・京都橘女子大学)

「中・近世京都の治水史について」

水山高久(研究担当・京都大学農学研究科)

「土砂災害対策(ハード・ソフトの現状と課題)」

・第5回 10月1日

寒川 旭(非常勤講師・工業技術院地質調査所)

「発掘調査から見た断層活動と地盤災害の歴史」

西上欽也(助教授)

「活断層における地震発生危険度評価」

・第6回 1月7日

松井三郎(研究担当・京都大学工学研究科)

「世界湖沼の環境危機」

藤田 正(客員教授・大阪女子大学人文社会学部)

「被害者の喪失と立ち直り」

・第7回 2月4日

広瀬弘忠(運営協議員・東京女子大学文理学部)

「災害とブラシーボ効果」

上野弘道(客員助教授・鹿島建設技術研究所)

「実験観測シミュレーション解析と
コンピュータグラフィックス」

「大規模河川氾濫の危機管理」 (林 春男)
15:15 まとめと討論 (司会 河田恵昭)

2. 第5回地域防災計画実務者セミナー

平成11年度実施したテーマは「風水害防災を学ぶII」であり、講演者は、以下の通りである。

第1日目(5月19日)風水害防災基礎講座
オリエンテーション

10:00 「危機管理としての防災」 (林 春男)

10:30 特別講義「地域防災計画の考え方・風水害編」
(消防科学研究センター 日野宗門)

12:00 昼食

13:00 講義 1(～14:00)「気象災害」(岩嶋樹也)

14:15 講義 2(～15:15)「洪水災害」 (寶 馨)

15:30 講義 3(～16:30)「土石流災害」 (中川 一)

16:30 終了

第2日目(5月20日)ベストプラクティスに学ぶ

9:00 パネルディスカッション(～12:00)

「平成10年度の風水害の教訓」

パネリスト:群馬大学工学部 片田敏孝

高知大学農学部 大年邦雄

高知県総務部 浦田博幸

高知市総務部 松本勝彦

兵庫県土木部 水野雅光

コーディネーター: 河田恵昭

12:00 昼食

13:00 特別講演(～14:00)

「バングラデシュの水災害」 (岡 太郎)

14:15 実習(～17:00) 防災意識啓発と研究事業
をどうすすめるか

「ハローボランティアみえ」

(三重県総務部 平野 昌)

「防災DIG」

(防衛庁防衛研究所 小村隆史)

第3日目(5月21日)今後の防災の方向を考える

13:00 講義 1(～14:00)「気象災害」(岩嶋樹也)

9:30 報告1(～10:45)「河川審議会の答申を
受けて」 (建設省河川局 平井秀輝)

11:00 報告2(～12:15)「水循環についての新しい
考え方」 (環境庁水質保全局 内田 勉)

12:00 昼食

13:00 巨大災害センター報告1(～14:00)

「危険の受認限界-高潮災害を例にして」

(河田恵昭)

14:15 巨大災害センター報告2(～15:15)

3. 第3回大規模災害対策セミナー/伊勢湾台風 から40年を考える

1. 日時:1999年9月23日(木・祝日)

2. 場所:三重県・桑名市コミュニティプラザ

3. テーマ:あの伊勢湾台風が今来たら～地域の安全
と危機管理～

4. 趣旨

最初に今年度の開催動機、経緯などをご紹介します。

1) 大規模災害対策セミナーの位置づけ

1995年の阪神・淡路大震災は多くの尊い命と財産を奪い、人々に大きなショックと苦痛を与えました。その苦痛は4年8ヶ月経った現在も続いております。このような天変地変による大災害。それは人類が有史以来幾度となく経験したことで、地震、火山噴火、洪水、津波、高潮など様々な災害が、現在世界各地で頻発しております。これらには、地球環境の変化、世界的な人口増加と都市への人口集中、自然と対立しがちな現代文明の特質などの要因も関係しており、今後、大災害の発生の危険性はますます増大していく傾向にあるように思われます。1998年の中国・長江やバングラデシュの大洪水、パプアニューギニアの今世紀2番目に大きかった津波災害、ハリケーン「ミティ」による中南米の災害、今年のコロンビアの地震、そして8月のトルコ地震、9月の台湾の大地震など枚挙に暇がないくらいです。今こそ、大災害にいかに対応するかを考え、安全で快適な地域社会を形成していくことが、人類にとって最も重要な課題になっております。そのためにも、阪神・淡路大震災の時の思いを忘れることなく、貴重な教訓として生かしていかなければなりません。

阪神復興・岩井フォーラムは、阪神・淡路大震災による被災地域の心豊かで安全な社会を創造するため、多方面にわたる議論と必要な調査、研究活動を通じて、各方面へ提言を行うことを目的としているものでありますが、その成果は同時に他の地域にも役立つものと信じています。このフォーラムでは4つの分科会が置かれており、今日の主催団体の1つ、大規模災害対策研究会は、その中でソフトの部分を担当しております。毎年、このようなセミナーを開催して、成果を社会に役立てることを試みております。

2) 過去2回のセミナーの内容

一昨年に行いましたセミナーでは、「現在の危機管

理を検証し将来に備えるために」をテーマとして、これから起こるであろう世界の大災害とは、そして、自治体や国がこの震災復旧・復興にどのように取り組んだのか、電力会社や水道局は復旧作業に際しどのような困難があるのか、また、被災地の住民団体はどのような組織を作り動けばよいのか、企業はどのように対処すればよいのか、その時の経営者の判断はいかにあるべきか、それらの情報の収集と共有化はどのように行うかについて話題提供があり災害対策への連携と課題と題してパネルディスカッションを行いました。

昨年は、「いざというとき間に合いますか？災害支援の決め手“人、もの、情報”」をテーマとして、震災時の道路交通マネジメントシステムの基調講演の後、港湾・道路・鉄道の復旧過程の紹介とパネルディスカッション「災害時の輸送ロジスティックスについて」を行いました。

これらは、いずれも都市地震災害を視野に入れたテーマとなっていますが、ほかの大規模な災害に適用できるとも考えております。

3) 伊勢湾台風 40 年シンポジウムの位置づけ

さて、本年は伊勢湾台風から 40 年という節目を迎えております。阪神・淡路大震災のあと地震の恐ろしさから官民挙げてその対策を講ずるということが積極的に行われて参りました。しかし、その間隙を縫うように昨年は東北から四国地方にかけて洪水氾濫・土砂災害が頻発し、その傾向は本年も続いております。このように災害は手換え品換え、私たちの社会を襲ってきているというのが現状です。今日、セミナーで取り上げます高潮も全国的に過去の災害に位置づけられようとしております。しかし、地球温暖化のもとで台風やハリケーン、サイクロン災害が多発・激化している現状で、高潮災害の恐ろしさを今一度思い返し、新たな気持ちでこの災害とどのように付き合えばよいかを考えることが必要ではないかと考えております。たとえば、1991 年にはバングラデシュで高潮災害によって 14 万人以上の住民が亡くなっています。ヨーロッパでも高潮の脅威が去ったわけではなく、たとえば、一昨年オランダのロッテルダムにあるユーロポートに長さがエッフェル塔の高さと全く同じ水門が 2 基、合わせて 600m の世界一の水門が完成致しました。また、イタリアのベニスでも沖合のラグーンに水没式のゲートが造られ環境と景観に配慮した構配慮した構造になっております。ロンドンもテムズバリアーで守られるようになるなど、先進諸国では高潮対策に継続的に取り組んでいるのが現状です。

わが国における高潮災害は、歴史的に江戸時代の

1828 年のシーボルト台風による有明海沿岸での約 2.8 万人の高潮災害を筆頭に、千人以上の高潮災害が西暦 600 年以降 30 回弱起こっております。シーボルトは幕府の禁制品を国外に持ち出そうとしてこの台風で船が難破し、それが発覚して翌年、国外追放になったわけです。伊勢湾台風による高潮災害による人的被害も 5,101 人にのぼり、わが国における今世紀の自然災害による人的被害の大きさについては、関東大震災、阪神・淡路大震災について 3 位の位置を占めています。とりわけ被災地の死亡確率は阪神・淡路大震災を上回るものがあります。たとえば、阪神・淡路大震災では比較的高齢者が犠牲になりましたが、伊勢湾台風高潮災害では、832 人の学童が犠牲になりました。幼児・少年の犠牲者が非常に多かった特徴があります。ランドセルを背負ったままの遺体がかこかしこで発見されました。鍋田の干拓地では妻帯者 70 世帯のうち 20 世帯が一家全滅し、新婚 2・3 ヶ月の所帯が 16 世帯もありましたが、その花嫁 16 人はすべてなくなり干拓地にいた 15 人の子供のうち、わずか 4 人しか生き残らなかったという悲惨さであります。その復旧・復興事業の難渋さは、阪神・淡路大震災以上のものがあったと言ってよいでしょう。しかし残念ながらその教訓はほとんど風化し、関係者の中でしか残っていないというのが現状ではないかと考えております。このような悲惨な災害を繰り返さないためにも、今一度問題がないかどうかを検討することが必要ではないでしょうか。

4) このシンポジウムに何を期待するのか

では、今回のセミナーで一体どのようなことを議論し、それを残して行く必要があるのでしょうか。その 1 は、風化が進んでいる各種の教訓を現代に適用するために再検討する必要があると考えられます。伊勢湾台風当時、わが国の経済成長率は 7% でした。国としては伸び盛りでした。したがって、大きな被害の割に復興も早かったわけです。しかし、高齢化時代に入りそのような活力はわが国にはもうないといってもよいでしょう。阪神・淡路大震災の経済復興が遅れていると言われますが、その一つの原因に豊かさになれてしまって、がむしゃらに働かなくなっているという事情が非常に大きく影響していると考えられます。2 番目には、わが国の高潮常襲地帯である東京湾・伊勢湾・大阪湾・有明海などでは一応高潮対策事業は終わったことになっております。終わったというのは高潮の大きさの検討が決着していると言うことです。しかし、40 年近く前には高潮の規模の決定、すなわち計画高潮の決定では高潮を起こす最悪のコースを伊勢湾台風

のモデルを走らせるということで決めて参りました。一例として、大阪湾では1934年（昭和9年）の室戸台風のコースを伊勢湾台風が通り抜けるとして高潮の偏差（すなわち台風によってどれくらい海面が上昇するのかということですが）を決めています。しかし、過去40年近く海岸工学や気象学が発展し、コンピューターの計算によって本当にこれらの決め方が妥当なのかどうかを議論できるレベルになっています。この伊勢湾でも大阪湾でも、もっと大きな高潮が発生するための条件がわかって来ております。しかし、わが国では災害が発生しなければ防災基準が改定されないという悪弊があります。その最たるものは大震基準であります。地震毎に厳しい値に変わりますが、古いものをどうするのかということが置き去りになってきました。阪神・淡路大震災、トルコ、台湾での建築物・土木構造物の被害は実に古いものに集中しています。今一度過去の計画高潮の決定方法を再検討する時期に来ているのではないのでしょうか。それから3つ目は、今日伊勢湾台風が来たらどうなるかということです。過去40年間、私たちの社会は激変いたしました。一言で申し上げると、どのような被災形態になるかを事前に予測し的確な対策を立てることが非常に難しくなってきました。それには社会の広範囲の皆様から是非知恵をお借りしなければなりません。今日のパネルディスカッションはこれを意図したものであります。

5. プログラム：

10：30 主催者挨拶 山川 朝生（建設省中部地方建設局長）

北川 正恭（三重県知事）

10：40 経過説明 河田 恵昭（大規模災害対策研究会 会長）

10：50 第1部<ビデオ上映>

『ドキュメント 伊勢湾台風～未曾有の災害から40年～』

体験者の真に迫った経験談や、当時のニュース素材、映像資料などを伊勢湾台風の正確な被害状況を振り返り、自然災害の恐ろしさ、それ以後の治水・防災への取り組みをビデオで紹介。

11：10（～12：00）第2部<基調講演>

『伊勢湾台風を振り返って～21世紀の防災のあり方をさぐる』

講師：岩垣 雄一（京都大学／名城大学名誉教授・工学博士）

伊勢湾台風による巨大災害がなぜ起こったかを明らかにし、その教訓をふまえて、今後このような異常な外力に対処するには、どうしたらよいかを考究。

13：30（～15：30） 第3部<パネルディスカッション>

『あの伊勢湾台風が今来たら～地域の安全と危機管理』

コーディネーター

藤吉 洋一郎（NHK解説委員）

パネリスト

河田 恵昭

高木 不折（名古屋大学教授）

大西 晴夫（気象庁予報部通信課無線通信室長）

山田 昌（女優）

門松 武（建設省中部地方建設局河川部長）

なお、シンポジウムの模様は、1999年10月29日（金）のNHK教育テレビ「金曜フォーラム」にて全国放映された。当日の入場者数は473名（うち、同時上映アニメ参加者98名）であった。

4. Memorial Conference in Tokyo および in Kobe Vの開催

4.1 Memorial Conference in Tokyo の開催

（1）この会議の開催主旨

阪神・淡路大震災からまる5年がたちます。被災地に暮らす人にとっては、依然として震災の影響は多くの面に残っています。これまで復旧・復興に忙しく、この5年を振り返る暇もなかった人も多いはず。5年が過ぎようとする今、やっと自分たちの5年を総括しようという試みが各地で起こってきたところです。被災地外に暮らす人にとっては、もう阪神・淡路大震災は過去のことかもしれません。この震災は第2次世界大戦後、近代都市が体験した最大の自然災害です。その教訓は計り知れないものがあります。ところが、震災から2ヶ月後に起きたサリン事件のために、その後の復旧・復興の苦労はマスコミも断片的にしかとりあげなくなりました。そのため、あれだけの体験をしながらその教訓を十分に学ばないままにこの5年間を過ごしてきたかもしれません。震災から5年がたった今、被災地内の人にとっても、被災地外の人にとっても、阪神・淡路大震災とは何だったのか、その教訓として何を学ぶべきなのかを考える、ちょうどいい時期に来たといえます。私たち阪神・淡路大震災の教訓を世界と21世紀に発信する会（組織委員会会長新野幸次郎）では、震災1年目から毎年「メモリアルコンファレンス・イン・神戸」を被災地で開催してきました。この会議は「メモリアル・コンファレンス・イン・神戸

X」まで継続しますが、中間年にあたる5周年目に、これまでのまとめをかねて、東京でも「メモリアル・コンファレンス・イン・東京」を開催することにいたしました。この会議のねらいは、次の通りです。「阪神・淡路大震災から私たちが学ぶべきことは多く、それぞれの分野で検討や分析が行われています。しかしながら、各人が自分たちの分野の人たちとのみ話し合うのではなく、いつもとは違った言葉で、異なる背景をもつ人々と語り合うことは大変重要です。この災害のもつ多様な意味を理解するためにも、また、再びこのような惨禍をを繰り返さないためにもこうした話し合いを続けることの意義は大きいと考えられます。この会議(Memorial Conference)は、2005年までの10年間、毎年継続して開催することになっております。」

(2) プログラム

(1日目)

日時：2000年1月17日(月)

場所：建築会館ホール

内容：

9:30 会場

10:00 開会式 ●総合進行 藤吉洋一郎

(NHK解説委員)

●開会挨拶 新野幸次郎

(組織委員長)

(神戸からのビデオ出演)

— 黙祷 —

10:30 「ボクの不思議、私の疑問」

●コーナーパーソナリティ

上田誠也(理化学研究所国際地震フロンティアセンター)

東京・神戸の小学生の子供たちが、災害や防災について持つ素朴な疑問を自ら解き明かすために、探検に出かける。その過程をビデオで記録し、当日紹介する。会場に来た子供たちと上田誠也氏とのトークを交えながら、各エピソードを15分程度で3本紹介する。

12:00 昼食

13:30 「神戸に汗したあの頃・・・お元気ですかみなさん」

●コーナーパーソナリティ

田中智佐子(毎日放送)

高井美紀(毎日放送)

さまざまな立場で災害対応に従事した人たちの5年後を訪ねた「あのとき」を振り返るビデオレター。もう一度災害にあっても、次の時も絶対にやるべきことは何か、次はもっと工夫してやるべきことは何か、次の

時は絶対にしてはいけないことは何か、を尋ねる。それに加えて、意思決定に携わった人々には、もっとも難しかった決断は何かを尋ねる。

15:00 休憩

15:30 「一・あの日・一・未来、おもいを音楽と

言葉に託して」

●コーナーパーソナリティ 藤吉洋一郎

(NHK解説委員)

アンサンブルシビル(土木学会メンバーによる学会楽団)の演奏をバックに井上堯之氏が自らの震災体験を語る、

その想いを曲にした「DISASTER」(メモリアルコンファレンスのテーマ)

井上堯之作曲による「DISASTER」を作曲者自身の指揮、アンサンブル・シビルの演奏による世界初演。アンサンブルシビルの演奏をバックに災害の詩を広瀬修子さんが朗読。

●指揮 井上堯之

●演奏 アンサンブル・シビル 土木学会メンバー

●朗読 広瀬修子(NHKアナウンサー)

17:00 第1日目 閉会

(2日目)

日時：2000年1月18日(月)

場所：建築会館ホール

内容：

9:30 会場 ●総合進行 藤吉洋一郎

(NHK解説委員)

10:00 「セキュリティ確保のヒミツ」

●コーナーパーソナリティ 吉村秀実

(NHK解説委員)

マリー・クリスティーヌ

(日本都市計画学会員)

●ゲスト 岡田恒男(日本建築学会会長)

西川孝夫(日本建築学会地震防災委員長)

坂本 功(東京大学教授)

石黒哲郎(芝浦工業大学教授)

濱田政則(土木学会地震工学副委員長)

亀田弘行(理化学研究所地震防災フロンティア研究センターセンター長)

11:30 昼食

13:00 「震災復興を検証するーまだ神戸は終わっていない」

●コーナーパーソナリティ 新野幸次郎

(都市問題研究所 所長)

5 年間にわたる復興の歩みを振り返り、災害復興までの長い道のりを実感する。神戸の復興状況と今後の展望を、検証会議の成果を踏まえて、まち・経済・住まい・生活の切り口から総括する。

●ゲスト

「行政の視点から」

井戸敏三 兵庫県 副知事

「まちづくりの視点から」

安田丑作 神戸大学 教授

「経済・文化復興の視点から」

小森星児 神戸山手学園 理事長

14:30 休憩

15:00 パネルディスカッション 「社会全体の保険としての災害対策」

●コーディネーター 土岐憲三 (実行委員長)

・災害対策は社会全体の保険であるという視点から、自然による災害に対する保険の概念のあり方を考える。

・個人的な保険と国や自治体などの保険との対比、復興対策と保険との関係などから、「社会全体の保険」のさまざまな側面について検証する。

・経済の低成長期を迎えて、あるべき防災対策・学べき防災対策のすがたを描き出す。

・先進国と発展途上国との対比を通して、発展途上国における社会全体の保険としての災害対策の問題。

●パネリスト 井戸敏三 (兵庫県 副知事)

石原信雄 (阪神・淡路大震災記念
協会 理事長)

加藤 勲 (日本 IBM Global
Services 副社長)

広瀬弘忠 (東京女子大学 教授)

東浦 洋 (国際赤十字・赤新月連
盟アジア太平洋部長)

16:30 閉会式

東京宣言 新野幸次郎 (組織委員長)

(3) 東京宣言

阪神・淡路大震災からまる5年がたちました。被災地に暮らす人にとっては、依然として震災の影響は多くの面に残っています。これまで復旧・復興に忙しく、この5年間で振り返る暇もなかった人も多いはず。5年が過ぎようとする今、この5年間を総括しようという試みがありました。

被災地外に暮らす人にとっては、もう阪神・淡路大震災は過去のことかもしれません。この震災は第2次

世界大戦後、近代都市が体験した世界最大の自然災害です。その教訓は計り知れないものがあります。ところが、震災から2ヶ月後に起きたサリン事件のために、その後の復旧・復興の苦労はマスコミも断片的にしかとりあげなくなりました。そのため、震災の教訓を十分に学ばないままにこの5年を過ごしてきたかもしれません。

私たち「阪神・淡路大震災の教訓を世界と21世紀に発信する会」では、震災1周年目から毎年「メモリアル・コンファレンス・イン・神戸」を被災地で開催してきました。この会議は10年間継続しますが、中間年にあたる今年は、これまでのまとめを被災地外の人にも知ってもらうことを願って、「メモリアル・コンファレンス・イン・東京」を2000年1月17日・18日に建築会館で開催いたしました。

2日間全体のテーマは「災害や防災についての素朴な疑問に答えよう」です。災害や防災についてわからないこと、腑に落ちないこと、知りたいこと、いろいろあると思うのです。そうした疑問を「ボクの不思議、私の疑問」、「神戸に汗したあの頃...お元気ですかみなさん」、「...あの日・...未来、おもいを言葉と音楽に託して」、「セキュリティ確保のヒミツ」、「災害復興を検証するーまだ神戸は終わっていない」、「社会全体の保険としての災害対策」の6つの側面にまとめ、現時点でもっとも信頼できる回答者に答えてもらいました。それをまとめて体系化することが、阪神・淡路大震災の教訓ともなると考えました。

この会議を通してみなさんにお伝えしたい災害の真の姿には、次のようなものがあります。

1) 多くの人が災害の怖さや悲しみを知らない。学校では教えられないし、経験をとおしてしか学べないものが多数あるからである。しかも、災害はまれにしか起きないので、災害を乗り切る知恵を世代を超えて身につける場を作ろう。

2) 時間の経過とともに災害は、つぎつぎと姿を変え、新しい問題を投げかけ続ける。被災の意味は、人によって皆異なる。災害を一言で言い尽くすことはできない。

3) 被災者の心は、亡くなった人、無くなったものをいつまでも忘れない。被災者の立ち直りとは、亡くなった人、無くなったものの新しい関係を作り上げる努力を通して可能になる。

4) 人の苦しみを知るには豊かな想像力がある。人を助けるにも豊かな想像力がある。相手の身に立って役立つことを考えることを、防災の基本としよう。

5) 今後被災地に生きる人の知恵として、覚えておいてほしいことが3つある。すなわち、むりしない、おしつけない、はずかしがらない、である。

4.1 Memorial Conference in Kobe V の開催

(1) プログラム

- 9:30 開会の辞 新野 幸次郎
(組織委員会委員長)
- 9:45 テーマセッション
人生の先輩から次の世代へのメッセージ
あなたの体験を伝えませんか
- 1.ご挨拶 今村 努
(文部省生涯学習局 審議官)
- 2.証言発表
●弾き語り 神戸 國男
(フォークシンガー)
- 3.記念品贈呈
- 12:00 昼食
- 13:00 パネルディスカッション1
「高齢社会と都市災害」
●コーディネータ
立木 茂雄(関西学院大学社会学部 教授)
- パネリスト
市川 禮子(高齢者総合福祉施設あし
や喜楽苑 総施設長)
- 梶 明(兵庫県営大倉山住宅自治会
会長)
- 石川 矩寿(シビルベテランズ)
- 藤田 綾子(光華女子大学 教授)
- 前澤 朝江(兵庫県婦人防火クラブ連
絡協議会 会長)
- 14:45 ニューフィルハーモニー・ジュニアオー
ケストラ 演奏会
●指揮 武田博之
- 15:15 パネルディスカッション2
「震災5年目のまとめと提言」
● コーディネータ 土岐 憲三
(京都大学 工学研究科長)
- パネリスト
本日の話題提供者 全員

16:30 閉会の辞 土岐 憲三
(実行委員会委員長)

16:45～交流会2階「フィルドメール」にて

(2) 22の証言

1) 「1月17日5時46分阪神大震災・・・そ
のとき私達は・・・」 亀井 薫

『グラ！グラ！グラ！』『パパ！地震』といってフ
トンをかぶり、腹這いになり、主人の方に寄り、頭を
主人と並べたというより頭をつけたその時、『グル、
グル、グル、ガシャン！』。少し長いぞ、やっと止ま
った。体を持ち上げられた感じ、地面に叩きつけられ
た感じ、そして、私が最初にいったのが『きりもみ状
態』。そういったら近所の方も同じ言葉で表現したの
を聞いて、「ああ、自分の表現に間違いはない」と思
った。

ーこのゆれている間ーああ蛍光灯が落ちたかな？ー
ガラスに気をつけなくてはー早くサッシの戸を開けな
くては・・・ー

地震の揺れは止まったが、私のからだの下半身が動
かない。薫『パパ動ける？』主人『動けない』薫『私
のうえに何か乗っていて、どうしても動けない』主人
『ばくの上にもなにか乗ってる。動けない』薫『私の
足はつぶれそう。パパ体をもじもじして出て』主人『よ
し！出られたぞ！』薫『早く廊下のサッシを開けて』
主人『そんなものあるか』

ー私達が寝ている部屋は6畳。南側に廊下。間は硝
子障子。廊下の南側はサッシの戸（ガラスが厚いため
重い）その南に庭。洗濯物を干すため、物干し
台が二台ある。2.5m ぐらい南はブロック塀になって
いる。

私には主人が何を言っているのか理解できない。ア
ルミサッシも、大工さんが台風にも大丈夫と言ってく
れた硝子の厚いのにしていたのに、それが全く飛んで
いってしまうなど想像もつきません。真っ暗な中で、
首を持ち上げても何も見えない。私の右足の膝下が圧
迫されて潰れそう・・・ー

『とにかく助けを呼んで！』『助けて下さい！亀井
です。助けてえ。下敷きになった。助けて下さい。』
主人『助けて！助けて！誰か助けて！亀井です』その
うちにあちこちから『助けて！』の叫び声がする。
主人の声は迫力がない。きれいな声で透き通る。もっ
と、ドスのきいた声で叫ばなくては。薫『もっと大き
な声で呼んでよ！』

主人も精一杯の声を出している様子だが、何と言ってもアナウンサー希望の主人の声、こんな時には間に合わない。私の声の方が大きいはずと、首を持ち上げ、私は腹の底から『助けて下さい亀井です！』と叫び続けた。しかし、だれの返事もない。主人『近所中が、やられているらしい。だれも来てくれないよ。ぼくが瓦を除けようか？』と一枚ずつ瓦をはずす。薫『ピアノの方に投げてよ』私は首を亀のように持ち上げて、目を剥いて主人に指示をしていたようだ。

瓦を除けても、その下に 1.5cm もの厚さのベニヤ板・・・瓦で叩いたって壊れない。屋根も三年前に新しくして、天井も張り替えたばかりで痛んでいない。時間は 5 時 30 分にトイレに行って来て、また、フトンに入ったのだから、6 時にはなっていないと思う。この近所は年寄りも多いので早起きだ。しかし、火が出れば焼け死ぬかも知れない。主人に『火が出たら逃げてね』と言ったものの自分も一緒に逃げたい。でも足が動かない。

「ああ、これで終わりかな？」主人は頭を私の右脇に突っ込んで一緒に持ち上げようと言う。『駄目！止めて！そんなことで動く筈がない。パパが怪我をするだけよ』この間に何分たっただろう。10 分ぐらいかな。いや、もっと長く感じた。

そのうち、南側のベルドール大開(1LDK)に住んでいる男性達が階段を降りて我が家のブロック塀を乗り越えて来てくれた。『落ち着いて！落ち着け！瓦をはずそう。奥さんはどっちに体がある？』『頭から真っ直ぐ北東の方に』私は頭だけ出ている様子。私の上に大きな桜材の洋服ダンス。中には冬物が一杯詰めてある。その上に屋根が乗っているようだ。

その時、塀の方で『亀井さんガンバッテネ！』と言っている声が聞こえた。誰だろう。西側の二階の山下さんが窓から脱出できたんだな（先に出たことに腹が立つ。でも、私のところにも助けの人が沢山来ている。ああ、助かるかな？）

懐中電灯を主人に持たせ、若い人達が瓦をはずし始めた。『オッサン！どこを照らしてる？こっちや！こっちや！』薫『パパ皆の言う通りにして』あの人なにしているのかしら。困ったものだ。あとで主人にどこを照らしてたの？と聞いたら『今まで大声を出していたママが急に声がなくなったので、死んだのかと思ってママの顔を照らしたんや・・・』

実は、私は助けの人が来たので安心したのと、体力の消耗を防ぐために声を出さないようにしたのと、救助の仕事の邪魔になってはと思い、黙って足の痛みに耐えていました。

『頭にフトンを被って！』『ハイ！』とフトンとその近くに飛んできていたニットのスカートを頭からかぶり、じっとしていた。ときどき『足が潰れるよう。早くしてえ！』と言いながら。数人が屋根を持ち上げてもビクともしない。『洋服ダンスの中身を出そう』とダンスの裏側を破って中身を出した。少し足の痛みが減った。私を引っ張ったが私の体は動かない。ガッカリ。また、瓦の除去。『誰か二三人来てくれ！』と人と呼ぶ。今度は屋根を持ち上げ、男性二人が両脇から引っ張った。ほんの少しの足のゆるみを感じて私が『引っ張って！』と叫び、一、二の三で出してもらった。足のズルムケも覚悟の上で私はベシッと座った。そして、空が見えた。家がない。廊下もない。私の足は麻痺していて、膝は痛くて、立つことができない。

『おばさん立てる？』『骨は折れてないと思う。立たせて』『いい。ぼくがおぶってやる。絶対に離すなよ』男性が背におぶって、塀まで 2m 強のところをサッシと物干し棒を伝わって連れて行ってくれました（この人とは後日逢いました。まだ 22～23 歳でしょうか、若い子でした）。塀の下に、女の人が待っていてくれて、また、助けてくれました。

そのとき、我が家の大屋根の上に女性が 2～3 人見えました。勇気のある女性が手助けしているのかと思ったら、お向かいの奥さん達で、私の出るのを待って救助されたとか。

お向かいの家は、我が家の大屋根に 4 軒が倒れ掛かって 2 階の窓が屋根の前に並んだので出られた様子。1 階の人々は、つぶれた家の下で、2～3 時間後に救出されました。

マンションの廊下で、フトンの上にみんな肩を寄せ合って、休んでいました。次々に、出てくる人と無事をよろこび、まだ下敷きになっている人を捜し合っても、助けることもできず、ただ、娘の来てくれるのを待っていました。

娘の家は、昨年 8 月新築したばかりで、1 階を車庫にしているため、揺れ方も割りと少ない。私の家より北西へ 3 キロ弱。徒歩 27 分のところですよ。娘はまさか実家が潰れているとは夢にも考えず、家が古いので余震が来ると危ないから、自分の家に連れてくると言って出たそうです。私の家に近づくにつれて、被害の大きさに驚き、全壊した家に近寄ることができず足がすくむ思いだったそうです。『亀井さん！お母さん出したよ』『もう一本東の道をまわって行きなさい』と屋根の上の近所の方が知らせてくれた。道は、家が崩れて来て塞がれている。遠回りして、ガレキの上を乗り越えてマンションの入口に来た。私も主人もパジャ

マ姿。主人に娘の上着を掛けて、娘の靴下を一枚、主人に履かせて、私は、靴と靴下を借りて、娘の家へと出発。まるで乞食です。自分では、しっかりしている積もりでも、何とも情けない姿。そして、寒い。

倒れた家の端に、血を流した男の人や老人が寝かされている。救急車も来ない。もう、火の手も上がっている。消防車は走っているが、現場では水もなく消防士も立って見ているだけ。空は薄暗く、しかし、曇っているのではない。煙りで神戸の空は夕方よう。

警察のパトカーは走っているが何の役にも立たない。私もパトカーに近づき『四番町一丁目で生埋めになっています。助けて下さい』と言うと『今自衛隊に要請しています』結局、近所の人達で救出するより他はないのです。私の家の前のマンションの方々は近所の人々との交流もなく、挨拶もしたことのない人達でしたが、今回は、皆で呼出し合って救助に出てくれました。感謝の一語に尽きます。

娘の家では電気がつき、テレビも映っていました。東灘の情報が多く、フトンにくるまってる人がテレビに映るたびに、「長田を映して！フトンを持ち出している人は、家のある人。もっと西の方を映してよ！」と怒りに震えましたが、実は西の方まで報道が入るにはもっと時間が掛かりました。ヘリコプターの来訪には、その風のために火が噴き上がり、火災が強くなり困ったようです。

私は考えました。「時計を腕にして、眼鏡は掛けて、お財布は紐を付けて足にくくり、重要書類は腹に巻き付けて、夜は眠るべきだ。しかし、脱出のとき、すべて引っ掛けて、はずれてしまう。ああ、だめだ！何の用意も何の役にも立たない」と捨てばちな考え方が頭の中を駆け巡り、『自殺者が出るよ』などと口走り、しばらくの間は自分も自暴自棄に陥っているようでした。

自分がこれからどうして生きていけばよいのか考えることも出来ず、頭の中が真っ白とは、このことかと思いました。私が落ち込めば、主人が『そんなことを考えても仕様がなし。やり直すよりないさ』と強がりを行い、私が頑張ろうと思うと主人が落ち込み、機嫌の悪いこと。一晩目は一睡もできず、つぎの夜はウトウトできても、皆の眠ったのを確かめると、急に泣けて、一晩中泣き続けました。4～5日後に、娘のところの電話が復旧し、親類や友人からの励ましの電話……どれだけ私の力になったことでしょう。皆様に助けられ、やっと立ち直り、元気を取り戻して、昔の私になりました。いま、主人と二人、新しい生活に向かっていることが不思議にさえ思われます。四番

町一丁目でも12～13人の死者を出しました。

いまでも、長田区は、家の片付けなどでとても空気が悪く、口の中が気持ち悪くなります。私の家も、まだ、解体されていません。五月ごろになるでしょう。家の中のものはどうなっているのか……なにかひとつでも出てくれるといいなあと考えています。

『いのちが助かったのだから、品物はまた買えるから、あきらめなさい』と娘に言われるのですが、やっぱり思い出の多い品物をひとつでもいいから取り出したいと思うのは私の欲でしょうか。

2)「一月十七日の私」 幾島浩恵

神戸市東灘区、財団法人甲南病院にて。午前1時過ぎ、準夜勤が終わり、看護婦寮に戻った。やっと眠りについたのは明け方5時。ごく普通の日が終わった。

突然の激しい揺れ、部屋から這いずり出て寝巻のままで自分の勤務先、五階内科病棟に向かう。詰所はメチャクチャ。でも、重傷者がいなかったこともあり、皆大きなケガもなく無事という。

外来から手伝いを求められる。一階はいつの間に集まったのか、人、人、人。とにかく動くしかなかった。清潔な器具はすぐになくなった。消毒液に浸して続行。手袋、ガーゼ、糸、麻酔も少なくなる。

ドアの上に乗せて運ばれた人。でももう息はなかった。床に寝かされた人に2人がかりで心臓マッサージ、人工呼吸をしている。戻るのか、戻ったところで治療が出来るのか。

あちこちで叫び声が聞こえる。子供の名か家族、友人の名か。返事は返ってこない。

小さな白い包みを胸に抱いて、女性が天井を見つめていた。表情はなかった。頭まで白いシートで覆われたものは、遺体を意味する。それは本当に小さかった。

大きな白い包みは無数にあった。寄り添う子供も石のように動かない。

日が上がると同時に、自家発電の燃料が切れた。真っ暗な中央階段を懐中電灯で照らしながら患者さんを抱えて五階まで何往復も走った。

モニターは絶えず動いていた。生死を見極めるためだけに、それは使われていた。弱々しい鼓動。この人は亡くなろうとしているのに何も出来ない。原因さえ知る術がない。呼吸が止まり、アラームが鳴った。誰かが駆け付けて来るのなら、それまで蘇生を続けよう。でも、どこの誰かも分からない。見守る家族もない。モニターが静かに直線になった後、シートに包んで一階まで運んだ。頭部を支えた手が血に染まっていたが、洗う水もない。

五階の一室に、2人の女性の遺体が運ばれてきた。彼女らは、看護学生だった。空を掴むような硬直が、いかに苦しかったかを語っているように見えた。もう何年かすれば、仲間になっていたのに。

あれから五年、生きていた私は結婚し、子を産み、母となった。幸福になった今も、あの時の、嘆き悲しむ人々の姿が自分と重なる。自然災害だから仕方ないとは思えない。万が一の時、大切な人と自分自身を守れるように強く、そして毎日を悔いのないように生きていきたい。

五度目の黙祷を心から捧げます。

3)「平成7年1月17日午前5時46分自宅での体験」

真田 道子

交通事故で寝たきりの母の介護について、3度目のお正月を迎えて、成人式が過ぎいつもの様に午前4時おしめをかえ石油ストーブが消えて1時間半たった。浅い眠りに入った所、午前5時46分、1階で寝ていた私と母は突然地鳴りがして、ゴーゴーと言う音とともに目が覚め「お母さん！地震！」と言ったとたん、かべが崩れ落ちて来て、ガラスがバリバリと音をたてて割れ、あっという間に、2階が私と母の上に落ちて来て、気がつけば、私は母の上に心臓と頭をかばうように伏せ、その間わずか4秒、私はただ助けて～と叫ぶばかり。そして次の瞬間、私と母は生き埋めになった。母は私の胸もとの下で横になったまま。私はその上で、ふたりとも胸まで壁つちに埋まっていた。真っ暗で静寂の中、ここに2人埋まっています。助けて～」と叫び続けたが、返事は何ひとつかえって来なかった。どれくらい叫んだのかわからないが、声がだんだん出なくなるのに気がつき、ダメだと思った。

私の胸もとの下にいる母に「大丈夫！息しているか！」と聞き、かすかな声でうなずいた母に「深く深呼吸して、絶対死んだらダメよ!!絶対にここから助けてあげるから」と必死で言葉をかけていた。その時、真っ暗の中、私と母のそばでガスの臭いがしてきた。もうこれで死ぬのだと思った。

でもその時、死ぬことを思ったとたん、絶対に生きてやる、このままでは死ねない、母を連れて…と思い、何とか冷静にと自分に言い聞かせた。

私と母は、年末に買ったソファの横で寝ていたため、そのソファの隙間30cmの所で胸から下は埋まって息をしていた。

まず私は何とかしなくてはと思い、右腕が動くことに気がつき、真っ暗な中、右手を手探りするとガチャガチャ、バリバリと言う音がし、すぐにガラス破片だ

と分かった。

ただどの様にしてここから出られるのか、出たらいいか考えた末、埋まっているのだから上にあがろうと思い、まず30cmの所で胸から下が埋まっている私の足を、自分で手を地面におさえつけるようにして、1本1本ぬき、母に「絶対に死んだらダメよ!!生きるのよ!!深く深呼吸して」と言い続け、1m以上あがり、私は隙間を見つけ、その隙間を手で少しずつ広げて、体1人ぐらいの穴をあけ、はじめて明が見えた時、空はもう明るかった。

母に「助けてあげるから生きてよ!」と言って、私は余震がくる中、まくらを母の頭の上のにのせて、もう一度その1m先の方を見ながら叫んだ。

「誰か助けて下さい!」と何回か叫んだ。すると男の人の声で「真田さんですか!」と聞こえた。私は必死で「真田です」と言い、「母とふたり埋まっています。私は大丈夫だけど、母が大変なんです。助けて下さい。」と言うと、男の人は「僕はとなりの後藤ですけど、助けに行きたいけど僕も今タンスに足がはさまって動けない。足が抜けたらすぐに行くので頑張ってください。」と返事がきた。母に声をかけながら待ったが、その後男の人の声はかからなかった。

そして私は母を穴の中に残して外に出ることを決意する。母に「助けてあげるから深く深呼吸していてね」と声をかけ、後ろ髪を引かれる思いで外に出た。すると人影はなく、まるで死人のような街であった。私はすぐ誰かいないかと探し、向こう側に男の人が立っているのを見つけ、近づいていった。自分がパジャマのまま血が流れて素足で足からも血が流れてボロボロにさけたパジャマ姿の私を見て男の人はびっくりした顔をして私に「大丈夫ですか」とたずねた。私は母のことを言い、指で自分の家の方を指し、その男の人をひっぱって途中もう1人、若い男の子がいたのでその人にも声をかけ、ふたりの男の人を自分の家つまり母の埋まっているところまで来てもらった。しかし、最初に声をかけた男の人はつぶれた家の酷さを見て、腰がぬけ穴の前で座り込んでしまった。私は若い男の子とふたりでもう一度母の埋まっている所まで行き、一緒に一、二、三と言って、母を埋まっている所から抜こうとするが、なかなか抜けない。母に「足などなくても生きていける。足を動かして～」と必死に声をかけるが母は「もういいから。私はいいから。」と小さな声でつぶやく。私と男の子は余震が続く中、最後の力を振り絞って母をひっぱった。そして母が穴から抜けた時、下半身はおしめが取れて素っ裸のまま、やっと生き埋まった所から抜け出たと思ったら母の唇は紫

色になり、呼吸がおかしくなってきた。私は地面に母を寝かせたまま、自分に血が流れ落ちてきているのにも気がつかず、なげ出していた布団をひろってきて母に掛け、「もう少しだから頑張って」と言って、車を探しに道路まで出た。すると車で逃げる人達でいっぱいだった。窓をたたいて、「助けて下さい。病院まで乗せて下さい」と言ったが、どの車も私の血だらけの姿を見てびっくりし、「急いでいるので」と言って走り去ってしまった。車をさがしに道路を歩いていると向こうから1台の車が来た。ワゴン車であった。若い遊び人のような男の人がふたり乗っていた。私は前と同じように「助けて下さい。母が死にそうなんです。病院まで乗せて下さい。」と言った。すると二人の男の人達は「じゃ、協力しよう」と言ってくれ、私と母を病院まで運んでくれたのであった。男の人達は今から明石まで友達が大丈夫かどうか心配で行く所だと言っていた。私と母はこうしてようやくお昼頃病院に着いて、まずは命を取りとめたのだった。平成7年1月17日午前5時46分、この日におこった恐さ、辛さ、悲しさは私達親子にとって気力を与えてくれた日でもあり、この出来事は何年たっても忘れることの出来ないほど恐い体験でした。

追伸：病院に着いてドアを開けるまで助かったと思っていたが、病院に入ってから私と母の大変な日々がまた続いたのであった。本当に助かったのは、1月21日午前2時大阪の病院であった。

4)「私の震災体験」 中野 由

平成7年1月17日5時46分悪夢の阪神大震災が起こり、深い眠りに入っていたのか、頭の上に瓦が落ちて来て初めて大きな揺れに気が付いた。我家は廻りの家に押しつぶされ、一階で寝ていた私はガレキの中に閉じ込められた。近くに住んでいた息子にひっぱり出してもらい、外へ出た時には廻りの家はみな倒れ、あちこちから、「誰か来て。パパ早く来てー。」と悲鳴がきこえて来てまるで地獄絵のような惨状だった。向いの家も裏の家も、声のしない家は全部即死だった。後で聞くと、同じ町で亡くなった人は43人にのぼった。古い大きな家は、昔のはりで一家全滅の家もあった。幸い火が出なかったから良かったが、ガスも止まり、電気もなく、さあ、家族5人の食糧をどうしようとまず食べる事からの戦いだ。避難所になっている小学校へ行ってみれば何か食料の支給があるかもしれないと崩れ落ちた43号線の陸橋をまたぎ、階段をよじ

登ってやっとの思いでたどりついたが、体育館は家を失った人で足の踏み場が無く、食糧など何もない状態だった。人々はただ茫然と立ちすくんで寒さに震え上がっていた。おにぎりの1個ももらえずトボトボと帰ってくると、近くのスーパーがお金は後で良いからと食糧を分けて下さり本当に助かった。地獄で仏に会った様で、今でもこのスーパーがなかったら私たち家族はどうなっていたらと思うとぞっとする。

それからは毎日、水と食糧の確保にかけずり回り体もクタクタになって疲れ切ってしまった。飲料水は2キロ離れた井戸水までくみに行き、トイレに流す水は夙川の水をくみに行く。1日に4・5回往復すると腕はむくみ、足は棒のようになる。その生活が10日程続き、もうこれ以上は無理だという頃に静岡県の人達が給水車で水を毎日持ってくれる様になった。わざわざ遠い所から来て下さるのが有難く、「寒いのに申し訳ありません。」と言うと、「私たちの所でもいつあるかわかりません。皆さんの方が気の毒です。」と励まして下さったのには頭が下がった。その翌日、愛知の自衛隊員が救援に来たので、裏の家のおじいさんが埋まって出て来ないから見て下さいと言っても隊長の命令が無いと勝手に出動出来ないと動いてくれず、プラプラと時間をつぶしてジュースを飲んでいる始末。昔の軍隊そのままだと腹を立て、地域の消防団を探して、掘り出してもらったら即死だった。遺体を戸板に乗せ広い道まで出したが、次々と並ぶ遺体も市からの回収車がなかなか来ず、寒い中何時間も遺族の人たちと遺体のそばに立って待った。人々の心も4年経つと助け合いの心を忘れよそよそしくなり人の気持ちの変化、情のもろさの寂しさを感じる今日この頃です。万一日本の何処かで又地震が起きた時に何らかの参考になれば幸いです。

5)「あれから5年です。」 南 マリコ

平成7年1月17日午前5時47分、なんの前ぶれもなく、私共阪神地域の大地が忽然と唸りをたてて揺れ動きました。

私共の地域築地は江戸中期、尼崎城の天守閣を中心に濠を隔てて埋め立てられた所です。今あるポートアイランドと類似しています。お殿様はこよなく築地を愛され、町も繁栄し庶民の情緒溢れる町として現在に到っていたのです。

その築地が大液状化現象を起こし、アスファルト道路は柘榴のように裂け、土砂が噴出しました。そのためガス管、水道管は破裂し、ガス、水道が吹き出していました。

「火を点けたらあかんよ。」「タバコ吸わんといて。」我々は必死になって叫びました。電柱は安定を失い道路に覆い被さっていました。

古井戸からも容赦なく噴水のように山砂が吹き出して、露地を、出入口を塞ぎました。家の座敷でも畳が押し上げられ噴き出した砂が山をなしていました。不幸中の幸いといえば、火災と死傷者がなかったことでした。若い夫婦が骨身惜しまず働いて、年の暮れに建てた家が地面の中にのめり込み、どっかりと仁王立ちしていたビルが45度傾きました。我が家も基礎に重点をおいた建て方でしたが、50cm陥没し裏にあった井戸から基礎部分の土砂が噴き出し後ろに深く傾いています。

震動が収まると息子が大声で「お母さん!生きてるか」声をかけてきた。「生きてるで。」被っていた布団から顔を出すとタンズ、本棚、洋服ダンスがピラミッドのようになっていた。その透き間に私の体がありました。夜はなかなか明けません。ガス、水道、電気は止まりました。辺りからただならぬ気配を感じました。後から神戸の惨状を知り愕然としました。

あれから5年。震災復興指定地域に認定され、いちからの町づくりが進んでいます。

現在のままでは、再び地震があれば町ごと沈没するという学術的な立場から土砂の1mの嵩あげ、全地域立ち退きと決定し、少しずつ復興は進行しています。公園に事業用仮設が設けられ、住民は新しい町を夢見ながら息をこらして工事の進行を見守っています。

阪神工業地帯の労働力を賄う借家人の多い地域ですので、庶民性ある長屋風の町なみは姿を消し、高層住宅が6棟建てられる予定です。道幅も消防車が入れるよう拡張されます。21世紀には、新しい姿で勇躍お目見え致します。

話はかわりますが、この度のような自然災害の前にあっては、人間は全くの無力だということです。地位、名誉、財産は何の助けにもなりません。唯、言えることは人の痛みのわかる人間でありたいということです。ひとつしかないものをふたつにわる。助け合いの心だと思います。その心が大きく人間に立ち上がる勇気を与えてくれるのです。

最後に震災で犠牲になられた6000有余人の犠牲者に対して心からご冥福をお祈り致します。

6)「証言」 卜部 道子

あれから5年の月日が流れる。被災した私は今でも、あの時の光景が鮮明に焼きついています。思いだしたくない、でも忘れてはいけないう出来事だった。小学校

の教室で畳2枚位の所で4人で過ごし沢山の人の世話になりました。本当にありがたかったです。運動場に並んで鍋を持ったり、発泡スチロールの器を持って並んだ事は私にとって生まれて初めての経験でした。プライバシーのない中、夜がぜんぜん眠れず疲労が限界になり、私は4月に肺炎になり入院し、精神的にもおかしくなり、家族に心配をかけました。私達は5ヶ月避難所生活をし、やっとの思いで西神の仮設に入居しました。1棟10世帯が16棟の仮設住宅、私は足のばせて家族の生活が出来る事にありがたく感謝をしました。次々といろんな区の人が入居して来て1人暮らしの人が沢山いました。8月頃にはふれあいセンターが出来、自治会が発足し私は役員として少しでも体を動かし、お手伝いをする事に心がけて自分自身が早く元気な体になりたいと欲していたところが今、夜はきつめまいにおそわれ又、精神的にも肉体的にもダメになり死を考えた事もありました。私は1年間の仮設生活の中、固く扉を閉めて心を開かない人、同じ立場の人ばかりなので団結し協力する人、酒におぼれる人、そんな中、私は自分の為にも何かがしたくて、仮設の人達のみ最小限の道具でカットをしたりして喜んでもらった様に思う。足の悪い人もいた。1人暮らしの人で朝から酒を飲み、はたから見ると陽気に見えたが結果は3人程、体を悪くして亡くなりました。ブリキの板一枚の壁で音には気がついた。

私達は目標があった為、頑張る事が出来、自宅、店舗も建ぺい率60%に減らされ思う様には再建出来なかったけど、おかげで建てられた店の内装はすべて長男が作ってくれて鏡二面の小さな店ですが今では地震前の半分位の人になり、ポツポツだが営業し、仮設で一緒だった人もたずねてくれて、うれしく、にぎやかに日々が送れる様になりました。ほとんどの仮設が無くなり復興住宅に入所した人達の話を聞くとさびしくつらく仮設生活の時が良かったと言う声をよく耳にします。この震災で人の心、気持ちがいやと言う程感じられました。昔の人が言ったことに「遠くの親戚よりも近くの他人」と本当にそうだと思う。私は沢山の知人がおり、本当に良くしてもらいました。仕事をしていて良かった。これからも頑張るって体の続く限り、美容の業をして行こうと思う。

7)「震災が私に気づかせたこと」 久永 雄介6

あの日の朝、私はたまたま起きる時間を1時間まちがえて、早く起きてしまった。すっかり身支度をしてしまってから気が付いた。いまさら寝床に戻るわけにもいかず、着いたばかりの新聞を読むつもりで、スト

ープのスイッチをつけ、念の為、テレビもつけてみたが、勿論まだ 5 時 30 分になっていなかったの、番組ははじまっていなかった。

突然座っていた椅子が飛び上がるような衝撃があった、揺れが始まった。瞬間に「地震だな」と思った。「かなり強い。それにしても、えらく長いな。」と感じた。そして次第に「これはいかん。ひょっとすると、天井が落ちて圧死するのではないか」と言う思いが頭をかすめた。でも不思議にもその時、「死」は恐怖ではなかった。

私には 12、3 才のころ、米軍の戦闘機の機銃掃射を受けたり、空襲による爆弾攻撃の経験があり、その時の恐怖の方がもっとリアルに「死」を感じさせられた記憶がいまでも鮮明である。

これは、それだけ私が年を取ったことの証左なのかあとあとで思った。

隣の部屋でまだ寝ていた家内を、ドアや襖を無理に押し開けて、倒れた筆筒の下から助け出し、同じマンションに住む義母や、近所に家のある娘や孫達の安全を確認してわが家に集めると、私はただちに自転車を駆って、朝夕の門・扉の開閉をお引き受けしていた小学校へと走った。

途中でそこかしこに、倒壊したり壁や屋根に損傷した家々が目に着いた。しかし町は意外なほどに静寂に包まれていたのが、いまでも強く印象に残っている。

さいわい学校はほとんど無傷の状態、その後は被災者の避難所として活用されたのは言うまでもない。そして私もまた先生方に申し出て、避難所の夜警などのお手伝いをさせていただいた。家人は、「年寄りの冷や水」などとあまり賛成ではなかったが、私にすれば、「お役にたつのであれば出来ることはなんでも」の気持ちもあった。

全国から寄せられた善意。ぞくぞく集まってきた若者ボランティアの活動に触発されたところもあったが、困っている人に、自分の出来ることをさせてもらうのは当然のことではないかと思うようになった。

私は現在、市内に住む外国人に日本語を教えるボランティア活動に参加させてもらっているが、これもあの震災が気付かせてくれたことである。

8)「震災を体験して」 倉田 華絵

震災は、私の人生を変えた大きな出来事であった。

当時高校 1 年生であった私は、まだ将来について考えず、今を楽しむ事だけを考え、過していた。そんな年の 1 月 17 日。阪神・淡路大震災が起きた。あまりにも突然で、一体何が起きたのかがわからず、ただ、

ただ、ベッドにしがみつきの揺れのおさまるのを待っていた。朝になり、テレビで被害の大きさを知った私は呆然とした。長田区は燃えあがり、三ノ宮などは信じられない有様。家族や家を失い泣き叫ぶ人々。「まだ中に人がいる!!」と、助けを求める人々。電話が通じず、身の安全を確認出来ない友人が沢山いた。

そんな時に知人の死の知らせを聞き、私は体の震えが止まらなくなった。

しばらくしてやっと学校が始まり、無事をたしかめ合っている友人達は涙を浮かべ、「良かったね。本当に良かったね。」と、口々に言いながらみんな泣いていた。家が倒れ、家族がケガをした友人は何故か明るく振るまい、「家、潰れてしもてん。」と、おちよけた口調で話す。その眼には涙が浮かんで「泣くものか!」と、くいしばる口元が震えていた。話をしている私も「泣くものか。」と口元をくいしばる。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。どうしてこんな悲しい思いをしなくてはならないのだろう。私には何も出来ないのか。励ます事しか出来ない自分に、苛立ちと悔しさが入り混じった。もう二度と、こんな気持ちを味わわせたくない、させるものか、と思い、将来、建設・土木関係の仕事に就く事を決めた。もっと地盤が強ければ、建物がしっかりしていれば、少しは状況が変わっていたかもしれない、と思ったからだ。

それからの高校生活は、今までの生活とは一変したものとなり、目標達成の 1 歩となる大学進学に全力を注いだ。震災から 5 年。今私は、着実にその目標に向かって歩いている。これから先、挫折しそうになる時は、あの時の悔しさを思い出し、突き進んで行きたいと思っている。「命を守る。」という目標に向って。

9)「証言」 西田 公夫

震災から二年余り経った晩春の一日、名古屋の YWC A 会館の一室では、支援者達の温かい笑顔に囲まれて、談笑している人達の姿が見られました。

愛知県へ避難してきた人達の憩いの場となる「会」が、やっとの思いで誕生したのです。

震災に遭った多くの人々が、諸種の事情で県外へ避難されましたが、行政当局は「県外へ出た人は恵まれている」と一方的に決め付け、その実態の調査はされませんでした。

馴れぬ土地で話し相手もなく、加えて酷い情報不足の中で、時には心ない人の「被災者のくせに」との理不尽な言動にも耐えながら、ひたすら帰郷できる日を待ち続けた私達に対して、「勝手に出て行った者の面

倒まで見られへん」と言い放ち、不十分ながら被災地では施行された支援も適用されず、それどころか二年近くも放置されてきました。

幸いにも、困窮する私達の実情を知る人達が、その組織づくりの支援に立ち上られ、運動は大阪を中心に全国へと広がりを見せましたが、協力を要請した被災地の行政が、把握していた県外被災者の住所の公表を、プライバシーを理由に拒否したため難行しました。

そのため愛知県では、その事情を新聞に記載してもらい、連絡用の電話にボランティアの学生が交代で張り付くなど、粘り強く活動を続け、半年間でやっと十七所帯の名簿登録を見ることができました。

他県では、被災者が組織をつくろうにも支援者がおらず、また支援しようにも肝心の被災者の住居が判明しなかったと聞きました。

「りりん愛知」と名付けた私達の会も、次第に参加者が増え、名簿登録者の数も五十を数える程になりましたが、百所帯はおるだろうと云われた他の人達には、連絡を取る術がありませんでした。

集会に参加された方が先ず口にされた言葉は「話し相手がなく寂しかった」でした。

組織づくりが被災者の心のケアに役立ったのは確かですが、万事OKとはいきません。

公営住宅の募集が始まっても、仮設優先のため私達への当選枠は極めて狭く、一次から四次までの募集に応募し、全部外れて悲嘆の涙に暮れた人もおられました。

「帰りたい、帰りたい言うと思った主人、神戸の土よう踏まんと逝てしもた」と、沈痛な面持ちで呟かれた老婦人、また「九十二になる母が動ける間に神戸へ連れて帰りたい」と、常々話しておられた年配の女性の母御は、希望が叶えられぬままに亡くなられました。

この言葉は今でも私の耳に残っています。同じ被災者でありながら県外へ出たというだけで、なぜこのような差別を受けねばならなかったのでしょうか。

10)「証言」 劉 佩青

1999年9月21日、台湾で死傷者2000人以上出した大地震が起きた。地震直後リダイヤルを繰り返して、ようやく翌日に電話が通じた。「全員は外に逃げ出したから、大丈夫だよ。それに後の壁がなくなって意外と明るいね。」とハイテンションでしゃべってくれた弟の話の深く考えずに安心して、地震から3週間後帰国することにしたら、「どこが大丈夫といえるのか」と震災の重大さに対する認知のずれを思い知らされた。被災地に近づけば近づくほど建物の被害がひどくなり、

懐かしい子どもの頃の思い出は瓦礫の増加とともに次々と浮かんでくる。記憶にあるものをなくすことがこんなにつらいと思わなかった。震災の街の情景は今も脳に焼き付いている。バス停の待合室の屋根が地面にある。周りに散らばった破片と瓦礫は、多分、窓と柱だっただろう。よく遊んでいた一面青々とした公園はテントに埋まっていた。その向こう側にあった庭付きの家も建物と断言できないほどにコンクリートと鉄筋の塊と化けた。

空港から家までだいぶ時間がかかった。道が地震によって壊れたため、遠回りしなければならなかった。人間は、目の前にある情景に圧倒されると、泣くより先に笑ってしまう。倒れた家具を除けて寝る空間を確保するお父さんの姿、半開きしたドアの近くに小さい机を囲んで食事をしている家族の姿をみて阪神大震災で被災した藤田先生の言葉を思い出した。被災地の「大丈夫」は「命が助かった」の意味で、ソトの人が思っている「元の生活に戻った」ではない。目の前の情景と電話の「大丈夫」の答えが作ったイメージとの落差に私は苦笑いしかできなかった。

本震が怖い、余震を待つのはもっと怖い。また来るだろうと分かっているが、いつ来るか分からない。

「恐怖を抱えたまま布団に入る日数の世界最高記録は何日だろう」という妹の言葉に笑った。余震に対する恐怖が生活リズムに変化をもたらす。些細な音にも神経を尖らせる。夕刊がドアに投げられた音にびっくりして慌てて外に逃げ出したお父さん、夜中にお父さんが体の向きを変えた振動を地震と錯覚して悲鳴を上げたお母さんの声などすべて笑い話の材料となっている。笑い話ができるならもう大丈夫だろうという人もいるが、そうではない。すべてを笑い話にすることによって必死に落ち着きを取り戻そうとしているのである。

95年の阪神淡路大震災のとき、大阪に住んでいる私は第三者として震災を見ていた。被災者がつらいと分かっている、そのつらさは想像に任せるしかできなかった。自分の経験から言えば、地震の痛さは経験しないと実感できない。被災地の状況を判断するとき、自分の日常的な基準に基づくのではなく、現地発信できる被災者の声を取り入れてほしい。そうすることによって、非被災者との交流ができるのではないだろうか。

11)「次の世代へのメッセージ」 長沼 満

その朝、私はゴミ出しの日なので1階のゴミ集積場に生ゴミを出しに行った。出し終わってエレベーターの方に行こうとして、エレベーターに10メートル位

の所に来た時、あの大地震に襲われたのである。

どっかーん、ずしーん、ばりーんの3つが一緒になったような巨大な音が突如として周囲に起った。私は倒れたように思うが、私自身は何か硬い壁が私の右半身を打ったように思った。床の亀裂、天井のコンクリート片の落下、朦々たる土埃、私は夢中で建物の下敷きになってはいけなと頭が閃いたので這いながら1階山側の広場に逃げた。次々に起る余震に此処も危ないと思って住宅を離れようとして裏側の道路に飛び出したのであるが、倒壊家屋がいっぱいあって遠くへは行けないようであった。

人々は唯、狂ったように呼び合い、生き埋めになった人々を探し求めて「早う助けてくれ。もう死んで仕舞う。」と叫んでいる人は、女の人か老人であった。しかしどうにもならんのは仕方がなかった。日本家屋は軒並倒壊して居たがどういことか1階がべっしょんこになり、2階がその上にちょこんと乗っているようなが目立って居た。1階で悲惨な死を遂げた人が多いのは後日聞いた。

私の住宅の周囲は、灘の高級住宅地で地震前は立派な家屋が目白押しであったがその殆どが倒壊した。神戸には大きな地震はないなどの巷の言い伝えなどを盲信して地震対策を怠ったのではないだろうか。

余震も少しおさまったように思った。私は住宅8階の妻を急に思い出した。住宅(10階建)も立っていてすぐ倒れそうもないので、急ぎ非常階段を避難して降りてくる人と反対に昇って行った。

部屋は、家具が山のようになって倒れて、妻の寝ている部屋には行けない。妻の名を呼びながら、私は家具の山を乗り越えようとした。しかし中々進まれない。妻はもう死んだのかと思って、一段声を大きくして呼んだら、微かに返事があった。あっ、生きてると老の力を振り絞って前に横たわっている本箱をずらして、声の方に踏込んだ。妻は、下半身を筆筒に挟まれて身動き出来なかったが、私の声を聞き、渾身の力で身を抜くことが出来たのである。私は足に怪我をし、妻は筆筒に挟まれた膝に内出血をして居たが、とに角命拾いをしたのを二人で喜んだのであった。

地震当初の揺れは、先ず東北の方に動いたと私は思っている。そして揺り返しは反対方向、西南の方に揺り返したようだ。家屋などは、この揺り返しで倒れたようである。私の見た限りでは、西南の方に家は皆倒れて居た。

次の世代へのメッセージなど、烏滸がましいことはとても出来ないが、私の体験の一端を書いた次第である。

12)「私の震災体験」 東田 せつ子

近くに住む息子のアパート(2階建、下2戸、上2戸)が全壊し、彼の生死がわからなかった。屋根瓦をのけて探しに入った夫が、子供の顔の上に乗っかっていた天井板の上に立ち、探した事も。屋根裏の砂が息子の口を塞ぎ、「もうだめだ。このまま窒息する、、、」と目をつぶったという彼。そのすぐ頭のわきに太い天井のハリがあったという。

救出までの長時間、そこらをただようガスのおい、その他の恐怖で居ても立っても居られなかった私の胸の内。大きな音をたて低空で旋回するへりに腹が立ち、「ここのケガ人を病院へ運んで!!」と聞こえないのに叫んでいる私。(この地域は全滅地帯だった。)

安全な場所を求めての途中、民家から突然大きな炎が吹き出し危うかった。(左どなりがガソリンスタンド。)ようやく安全と思った場所、須磨警察署の内部はパニック状態。ここで教えられた病院は、まもなく火の海の中。この場所からいつもは5分位で行ける他の病院に、1時間程かかってたどり着き、私の目にしたのは、明りの消えた暗く広い待合ロビーに横たわった人達がいっぱいで、足の踏み場もないとはこの事かと思う。ただ医師のペンライトだけが点滅し、一瞬の出来事に声もない人々、地獄をみるとは、この事かと思う。

避難所は須磨高体育館。昼夜、騒々しさにねむれず、2~3日後公園で暖をとる被災者が息子のアパートの戸板や柱を引き抜いては燃す。(公園が一番近いのと、完全につぶれていた。)そのうち中からめばしいものが見えてきて、1日何回となく自転車で足を運び、坂を登り下りした。

食事の悪さ、身体的疲れなどで1週間後、避難所トイレの前、つめたい廊下で私は意識を失う。一つ山越えた病院へ救急車で運ばれ、10日間入院。この時、始めてお風呂に入れてもらった。(それまでは電気炊飯器でお湯を沸かし、身体をふいていた。)

自転車で行き来している途中、和歌山ナンバーの車の人から軍手や下着を頂いたりとか、うれしかった事、悲しかった事がまだ多々あるけど、この辺で筆をおきます。

何年たっても、この時の事を思い出すと涙があふれてくる。

追。我が家の大変な様子は書けなかった。

13)「5回目の神戸証言」 横山 千鶴子

地震で家は倒れても体は無傷だった私が、罹災後 5 年近く経た今、車に跳ねられ 2 度目の転院先「神戸リハビリ病院」で忍従の日を送っている。地震翌日から神戸地区は車に埋め尽くされた。避難民の乗る車、救助に向う車の放列。電線が垂れ下り家の傾く道を、知人 D 氏の先導するバイクに、我々老夫婦は自転車に従う。車は大渋滞なのに自転車は小回りが利く。車の喘ぎを外目に坂を上る。

生徒が山陽電車、地下鉄、バスと乗り継ぎ小 1 時間はかかる K 高校に 1 時間余で到着。全く被災の跡のない校舎、避難民のいない避難所、水の出るトイレを別世界の風景として見た。全市がやられたわけではなかった！

D 氏の奥様の運転する車が到着せず、同方向の先生の車で D 氏宅に行く。平生車で 15 分の距離に 3 時間費やす。D 家も食器棚の扉が開き、食器がほとんど割れたと何うが、神戸西北の K 街は何事もなかったように静かだ。

自転車で急坂を上る途中、1 本千円で細い焼き芋を売っていた。30 時間近く飲まず食わずの避難民をカモにする不逞の輩もいれば、直ちにボランティア活動に見を投じる若者もいる。

地震直後、被災者一同秩序ある行動をとり、性善説を信じたくなったが、一夜明ければ人間の醜悪面を見せつけられる。

家を捨てる時、D 氏のバイクと我々夫婦の自転車にそれぞれ貴重品、必需品は乗せたが、物欲は案外きれいに消え去るものと知る。D 家に夫婦二人丸抱えでお世話になること 1 週間、多方面の友人・知人から住居提供の申し出を受ける。夫の通勤の便を優先し転居先を決めるが、夫の転勤もあり転々と移動する。

常に自転車が私の行動力の源泉だった。滝の茶屋駅からわが家方面に向う山陽電鉄が不通で、塩屋の浜に白いレースの縁取りのように打ち寄せる波を眺めたものだ。須磨公園、須磨、須磨寺、月見山と本来なら景勝の地を硝子の破片や家屋の解体作業に脅えつつ、元の地へ行く。罹災証明一枚得るのも難事業だった。30 年住み慣れた家の終焉も感傷なく 3、4 日冷静に見据えた。7 月には新居建築の便を考え、月見山駅近くにハイツを借り移住。いつも 63、4 歳の私が自転車で走る。

瓦礫、焼跡、廃墟の街。風が吹けば倒れてきそうな家がいつまでも残る須磨寺駅周辺。でも当時身障者ではなく、自分の足で歩き自分の足で自転車を漕いだ。今は松葉杖なしには 1 歩も進めない。家は 4 年前建った。家財も衣類も少しずつ買い備え、それなりの平安

を得た。すべてを破壊したのは暴走車だ。

地震以後、余震激しい瓦礫の街を自動車が埋め尽くした。家々を解体、撤去する車。工事の車。救急車、消防車、パトカーが地震の刻を呼び起こすように歳末の街を走る。いつも何かに追われるように自動車が街を駆け巡る。郷土の自然美は地震を契機に失われ、現在 3 本の自動車専用道路建設に向かって、着々と準備が進む。もはや身障者が通行できぬ都市に変わろうとしている。天災でなく人災だ。

14)「人生の先輩から次の世代へのメッセージ」

松本 武久

私は 1940 年 8 月大阪桃谷生れ、育ちは旭区 1940 年から 10 年間に戦争疎開今流で避難民、その他色々体験したのです。そして 1994 年 1 月にあの阪神淡路大震災にあったのです。職業はタクシー乗務員でした。今から思い出せば、直下型大地震を体験して何故か生きている。殆どの人は眠って気がつくとか家がこわれていたのでしょうか。私はおきていて、一部始終こわれていくのを見ていたのです。1 月 17 日午前 5 時 30 分頃からあの地震が伝わって来たのです。海鳴地鳴と続き、上下の微動に悩まされ逃げる事が出来なかった。その時にピカリと光って家の半分が山側へ、残りは海側へと割れて飛んだのです。私もテレビと一緒に 2m 程窓ぎわへ飛ばされてアッと気を失ったのです。会社の同僚が大声で来てくれたお陰で気がつき助かりました。2 階が 1 階になっていたのです。同僚の奥様は、死体で発見されました。会社は阪神大石の海側です。私は人災と天災で死の淵を歩きました。

メッセージとして、知る事とわかる事の違いを自分自身が汗を流し、体験して下さい。今の若い人鉦戦争に負けるな。ふり廻されるな。あわれみを多く求めるな。机上論空論が多い。今の世の中注意して自分自身の手で幸せをつかんで下さい。現在も脳内出血で倒れた後遺症で 2 年間苦しんでいる身障者です。やっと字が書けるようになったので報告します。

15)「証言」 佐原 ふくお

“ウー！ドーン！”今も恐怖心が残る。得たいの知れない鋭く強い突き上げ、渦巻く激しい横ゆれが瞬時に襲う。体は跳ね上りバランス感覚も失う。気付けば L 字型に座っていた。次の瞬間、事態を本能的に察知した。ただならぬ「地震」を。

当時、23 才の長男と 61 才の私の 2 人生活。彼は 1 階、私は 2 階で寝起きしていた。

子供の名前を叫んだ！返事がない！必死に叫び続け

た！帰って来ない！これ以上はないショックが走る。
かけ巡る！真白になった！激しい余震。悲痛だった。

「オヤジ大丈夫か！」子供の声が聞こえる。一瞬、
地震を忘れ、子供に・故父母に・先祖に・すべてに拝
み感謝した。

部屋を出た。どのようにして出たかは今も思い出せ
ない。早く子供の元気な姿を見たさだった。20年前
につけた階段手すりを右手でつかみ一段一段と途中ま
で降りた。子供が声大きくそこまで上ってくれる。彼
は私の左手をとって自分の肩をつかませる。二人して
手すりを持ちつつ曲がり階段を降りる。その肩から伝
わる子供の生命の温もりは終生忘れ得ないだろう。

二人、何とかして道路に出た。

近所のお家数軒も無残に倒れている！北にある坂道
の両サイドの石垣が崩れている！坂道がない！坂道下
のお家二軒がつぶれ、崩れた石垣の下になっている！
ただただ呆然！足元が・体が・心が・震える！

壊れたお家の方々から「助けて！助けて！」ご悲鳴
が。お家方々内の「大丈夫か！」の叫び合うお声が！
余震に脅えながら、道路に出た方々とご一緒に救助活
動が始った。

あれから5年。あのふるえ・あのおびえ・あの恐怖
が心に生き続けている。こんな私の支え歌として昨年
より某レコード会社様に指導を受けつつ演歌作りの真
似事を始めた。私の「証言」として我家に残したい。
添付の詞はその一つである。 以上

「命燃やして」

- 一、 流れる汗も 流れるままに
耐える山坂 浮世坂
いいじゃないか いいじゃないか
冬の花さえ 耐えて咲く
運命を背負い 俺なりに
命燃やして 歩こじゃないか
- 二、 あの日の未明の あの震災からも
天の助けを得た命
いいじゃないか いいじゃないか
寒波寄せても 春はくる
今も今とて 俺なりに
命かみしめ 歩こじゃないか
- 三、 枯葉も山に 幾年積もりや
繁る緑の糧になる
いいじゃないか いいじゃないか
わが子世代に この汗が…
祈りを添えて 俺なりに命燃やして 歩こじ
ゃないか

16)「あなたの体験」 岩崎 昭治

此の表題に果してあっているかどうか震災からの5
年の年月いままに被災者の皆さん方からの体験は出
尽くしているのでは有りませんか。被災のケースも人
それぞれと存じ上げます。ですから私の書くことがす
でに報告なされている折はおゆるし下さい。わが神戸
の町も復興成ったようには見られますが、どうしてま
だまだ心の奥の傷口は消えて居りません。一朝一夕に
あの悪夢は忘れられるものではございません。私のよ
うな素人が常々思いますのに何もかもが進んでいる中
で地震だけは起きましたという報告のみ。どうして地
震の予知が出来ないものなのかなと腑に落ちないの
ですが、よく耳にする巷の庶民や動物が感覚で地震の前
兆らしい出来事なんですが専門家の方々はどう受け止
められて居るのでしょうか。愚問でおそれ入ります。

私の体験ですが、

一、 避難所（学校）では安易に考えて休む場所が
なくてトイレの入口に毛布一枚で夜を明かし
ました。場所が場所だけにねむれるわけが
ありません。それと教室と廊下の床板の冷えが
忘れられませんです。

一、 殺人的な交通事情の体験も身がしまります。
四輪では動けないため単車でひとりしか運べ
ず、車の洪水の流れをぬって電車の動く所ま
で（阪神甲子園口駅）までを飛ばしました。
出来るだけ軽くというので体ひとつで乗りま
した。

一、 次女の家で2ヵ月世話になりました。
この氣を使う点は私だけでなく他の皆さんか
らもよく聞かされました事で時代の流れでし
ょうか。昔の修身で育った頭には理解に苦し
みました。実の子供に氣を使うなんて。子供
にも家庭が有り第一優先は当然ですが、何事
によらず自分達本位、親は口では優しく言っ
てくれても二の次またその次になる。亡妻が
想い出されました。自分の都合のよい考え方
教育の恐さを痛感させられました。

一、 仮設での暮らし
神戸の仮設より大阪が先に当って（淀川区）
に被災してはじめて仮設という住いを知りそ
こで三年半生活しました。四百棟からの仮設
でしたがお互い被災者同士なのでトラブルも
なく過ごせました。自治会長その他の好意は
忘れられません。又助け合わない仮設では
暮らしていけませんから、何せ出るのは年寄

りはいやがるもので親切も仇になりがちでした。ペットに関する小さなトラブルは絶えませんが、それぞれはそれなりの飼うマナーが欲しかったです。誰もスコップ、ナイロン袋と格好はよいのですが後処理をしてくれないのは困りものでした。

一、復興住宅への移行

県外に住む者は不利でした。行政にしても実情をつかむのが大変だったのでしょうか。すべてペーパー処理は一寸という気がします。神戸の様子がわからないため不満がつのりました。年寄り優先というのに父娘の娘が若いと落とされ、手紙も出したのですがいつも没。それにくじ運も悪いのでしょうか。5回ともだめで最後は仕方なく斡旋で今の所に。今でも紙面で仮説での仲良し組が集まって旧交を温めているのを見ますが、この有様が今一番の関心事ではないでしょうか。いろんな設備もととのった復興住宅のどこが不満なのか。建物かな。箱を積み重ねたような家、ドアをしめると孤立した箱。避難所とつき合いもない。心が淋しい被災者これではないでしょうか。私が一年余りはじめての団地暮らしで感じたので言ったまでですが、年金生活者が住む所ではないみたいです。皆さん自分だけの生活に毎日を生きていられるのでしょうか、もっと温もりのある所であればと思うのですが、流行におくればという若者のファッション、女学生の男子顔負けの言葉、年寄りの心は凍ります。

17) 「一瞬にして家も生命も財産も全て失われた阪神淡路大震災」 有末 博子

老年期に入った私には過酷な体験談である。家は全壊したものの主人と私は助かった。

六甲の美しい山並と碧き海に囲まれた街が壊滅的な打撃を受けた。「神戸は地震が無くてすばらしい所ネ」と話した事が裏目に出てしまった。平成7年1月17日未明「ゴオー」と云う異様な地鳴と共に家がげしく横に揺れ次は上下に揺れ身体は横にころび上下に躍った。アッと云う間に天井の梁が寝具の家に落ちて来た。辺りは砂埃が立ち暗闇の中、物が倒れる音がした。丁度寝床の上に大きな机があり落ちて来た。大黒柱は其れを支えに斜に止まった。其の空間に上半身が出ていたので呼吸が出来、助かったのだと思う。

「神様神様佛様」私は声を出し祈り続けた。弱者者

は神佛に頼る他、途は無い。自然と出た言葉である。幸にも息子の友人が近くに住んでいて2、3人助け出し其の後1時間位して壊れた瓦を一枚一枚男女5、6人で取り除き主人と私は寝間着姿のまま真冬の外に助け出された。冷たい大地に思わず身振した。

それから後は兵庫高校の教室で避難生活。ボランティアの方々からの給食、炊き出し、暖かい支援を頂き一と月位して息子の家で一年近くの間居生活をし、平成8年12月元の住所に新居を建て現在主人と二人暮らしで居る。

天災は何時来るか解らない。其の時人々はどうか対応するか。震災後、私の周囲にも以前の知人友人もばらばらに成り人通りも少なくなった。新しいマンションや住宅が建ち復興はしたものの住んで居る人の顔さえ解らない。

懐かしい下町的な人情味溢る家並や会話は無くなり淋しい思いがする。私の2、3人の知人は仮設住宅より恒久住宅に入居されたが何れも一日外にも出ず、部屋に居れば話す事も無く隣に住む人さえも解らないと口々に話される。老年期に入って孤独は心身共に良く無い。

世代を超えた人との和、人との交流が如何に大切であるか盡々思う。お互いに助け合い協力してこそこれからの人生の課題では無いだろうか。国内は元より外国の方々からも暖かいご支援、ご協力を頂き改めてお礼を申し上げ度い。私は私なりに楽しい音楽を聞き、美しい花を見たり育てたり又物言わぬ愛らしい動物の姿を追いつつこれからの余生を過して行き度いと思つて居る。

18) 「阪神・淡路大震災体験記」 関 朝宗

平成7年1月17日午前5時17分の大震災は私にとっては忘れられない出来事である。まだ覚めやらぬ夜明け突然大きな轟音と共に布団ごと上空にはね上げられ落下と同時に物凄い地響がした瞬間、体が埋まり自由がきかなくなった。それは一瞬の事で初めて地震だと分り急に恐ろしくなった。私は暗の中で必死に「助けてくれ」と叫び続けたが、外はパニック状態だったのか雑音に消され、ただ次々に揺れる余震にあせりを感じ、ああ私の人生はこれで終わりかと瓦礫の中で、いろいろと過去の事が走馬燈の様に浮かび悲しかった。それから4時間位して救出されたが連れ出された時振り返ると跡影もない無惨な瓦礫の凄惨さに身震いを感じ初めて助かったのだなぁと実感が沸いた。道路の向い側一面はパチパチ音をたて放水もなく燃え放題だった。道路は所々倒壊家屋で遮断され人々は只右往左往

し、その中で救出する人達が懸命な救助活動が続けているのが目立った。私は夢遊病者の様にあてもなく取りあえず日頃利用している老人憩の家へ行ったが、どんどん運び込まれる遺体で居場所もなくなり外に出てフラフラと近くの公園に行った。そこには沢山の人が、たむろし避難していた。これは震災当日の一コマだが、その後一ヶ月ばかり入院し子供の家や施設を転々とし仮設住宅での淋しく苦しい生活もしたが、今ようやく5年を迎え心身も落ち着きを取り戻し人並の生活が出来る様になった。今回の震災を体験し教訓を得た事は神戸は地震も少なく安全な街と云う神話は、くずれ災害は何時来るか分らないと云う事で備えるものは憂いなしの諺どおり、平素から非常用の保存食料、貴重品、その他取りあえず困らない程度の必需品を準備したり、避難場所の確認をしておく事、又自分達の街は自分達で守る防災意識の向上の為、地域に於ける防災組織の訓練に参加して、いざと云う時に慌てずに行動出来る心構えが大切だと痛感した。又想像を超える災害が発生した時、ライフライン「水道・ガス」など全てとまり、公共は麻痺し、消防署などの行政に依存する事はまず不可能だと思う。そう云う状態の中で自分達の街を守る活動をするのは地域の住民である。今回の地震で日頃言葉さえ交わさない人達が自分の身をかえりみず、瓦礫の中の人々を必死になって救助活動したあの光景は未だ脳裏に残る。人と人とのふれあい、助けあい、人に対する思いやり、この様な人間関係のぬくもりのある社会にしたい。災害時だけでなく地域の中に根ざす美しい人間関係の街になる様あの震災の時のみんなが持った心を風化させてはならないと思う。

19)「阪神・淡路大震災」川市 喜美子

あの震災から間もなく5年が来ます。

今でも「ドン。」という音がすると、又かと思えます。

あの朝、私達が住んでいる4Fのマンションの下が、「ゴーッ。」と言う音がしたら上下左右の大揺れ、電気は消え部屋の物はメチャクチャで、暗い中でじいさんが入口のドアを開けて「早くばあさん出ろ。」の声に70才の私には出るのがやっとでした。孫が心配でした。

孫の小学2年の女の子の名を呼び「ばあちゃん生きてるよ。」の声でほっとした所に、2F、1Fの階段は崩れて降りるのが怖くて涙は出るし、足は震えてマンションの人達にお世話になりながらやっと降りてみんなと公園に避難し、水も無く食べ物も無く昼過ぎか

ら車で加古川の長女の家に行き十日ほどおいてもらい、長女が川崎重工で働いているので、東加古川の川重社宅に三ヶ月間住まわせてもらい、みんなで嬉し涙が出ました。

川重さんありがとう御座いました。五月の中頃に東加古川の仮設にはいた時はどんなに嬉しかったか。今思っても、ありがたい事です。仮設の人は親切で又ボランティアの方が暑い日も寒い日も毎日お世話をし下さった事ありがたかったです。ありがとうネ。

仮設で亡くなった方は、金が無いため病院にも行けず、病死や孤独死が出たのは、国から少しでもよいから早く金を貰っていたら、少しでも死ぬ人が少しだったと思います。

私も病気の一人なので考えさせられました。

金の無い事、家の無い事はどんなに辛いか、分ってもらいたいです。

それなのに私の後で女子中学生三人が学校の帰り道に話している一言に「私らはあんな家には住みたくないなあ。」と平気でしゃべる子。どんな心をしているのか考えさせられました。

たしかに加古川の方には多い仮設が目障りだったと思います。

又、迷惑だったと思います。

せめてテントよりはましだよなあ、子供達がいるものなあと言ってほしかった。

今の学生には心の優しさが無いように思われます。人の辛さのわかる人間になってもらいたいです。親も家の無い人の辛さをわかってもらいたいです。

川重さんありがとう御座いました。

ボランティアの皆さんありがとう御座いました。

(2) 成果のまとめ—Memorial Conference in Kobe V からの提言—

Memorial Conference in Kobe V は、2000年1月22日、神戸海洋博物館において志を同じくする多数の参加者を得て開催された。これまで4回の Memorial Conference を通して、この災害が持つ多様な側面について学び、震災について正しく理解し、異なる背景を持つ人々が語り合い、伝え合う努力を続けてきた。10年間継続するこの会議の中間年にあたる今年は、これまでの5年間のまとめを被災地外の人にも知ってもらうことを願って、Memorial Conference in Tokyo を2000年1月17日・18日に建築会館で開催した。

今年の Memorial Conference in Kobe では、高齢社会下の震災を全体のテーマとしてとりあげた。午前中の

会議では 20 歳台から 70 歳台までの方々の 10 の被災体験を「人生の先輩から次の世代へのメッセージ」として紹介した。午後のパネルディスカッションでは「高齢社会と都市災害」の問題について語り合った。神戸國男さんの弾き語り、ニューフィルハーモニー・ジュニアオーケストラの演奏は参加者の気持ちを清めてくれた。また、展示会場では故草地賢一さんを偲ぶ展示をはじめ、さまざまな団体の試みが展示された。今年の会議から得られた教訓は次のとおりである。

すなわち、

- 1) 高齢者は自分自身だけでなく、家族を、地域社会を守らなければならなかった。再建の経済的困難とともに、長年慣れ親しんだ環境が失われることもショックだった。そのため、高齢者独自の苦勞、不満、悲しみがある。
- 2) 震災は人々に「生きる」ことの意味を改めて問うた。震災直後は「生き残った」ことの大きな感動があった。その後「生きる」目的を見つける長い試練の時もあった。
- 3) 高齢者は震災から自分で立ち直る力を持ち、立ち直ろうと努力を重ねている。しかし、一人だけでは立ち直ることはむずかしい。人と人のつながりが、被災者に大きな力を与える。地域社会は人々の生活の原点である。立ちかえるべき原点を失うと立ち直りもむずかしい。
- 4) 震災は決して負の遺産だけではない。復興を目指したこの 5 年間にたくさんの知恵や工夫が生まれた。それを過去のものとしてふりかえるだけでなく、これからの未来へと生かしていこう。
- 5) 震災の体験は人によりさまざまである。全体をまとめて語ることができる人は誰もいない。被災地の誰もが自分自身のことを一人称で語る必要がある。メモリアルコンファレンスは、それを共有する場であり続けたい。

来年の Memorial Conference in Kobe VI は、2001 年 1 月 21 日（日）、神戸海洋博物館において志を同じくする多数の参加者を得て開催する。

5. 第 2 回ワークショップ「災害を観る」 ー災害を観る眼の現在ー

5.1 開催趣旨

本ワークショップは、1997 年 3 月 4 日－3 月 5 日に開催された第 1 回ワークショップ「災害を観る」に引

き続き、「災害を可視化する」をキーワードにして、防災研究の最先端を紹介します。2 日間のワークショップでは、地震や台風といった自然現象としての災害から、被害軽減対策、災害対応策、防災教育といった災害の社会的側面までの、様々な試みが紹介されます。

防災は専門家の努力だけで実現するものではなく、市民一人一人の協力が不可欠です。そのためには、市民や防災担当者に防災をわかりやすく、かつ体系的に紹介していく必要があります。災害の可視化はその有力な手段です。とくに、近年のコンピュータを援用したシュミレーション技術の進展はめざましく、このような技術の積極的な導入によって、総合的な防災研究のための共通基盤が構築できるものと考えております。

本ワークショップでは、第 1 回ワークショップ後からの研究の進展と、その間におこった研究の新しい動きをふまえて、1) 研究成果のわかりやすい可視化、2) 研究成果の効果的なコミュニケーション、3) 防災研究における可視化の最前線を探る、などの点について、現時点でどこまで実現しているのか、今後考えるべき課題を明らかにしていきます。

5.2 開催日時・会場

2000 年 3 月 7 日（火）－3 月 8 日（水）

京大会館：京都市左京区吉田河原町 1 5－9

入場無料：来聴歓迎

5.3 スケジュール

2000 年 3 月 7 日（火）

- | | |
|-------------|-------------------------------------|
| 10:00-10:30 | 開会のあいさつ
京都大学防災研究所林春男 |
| 10:30-11:00 | 津波災害を観る
東北大学 今村文彦・鹿島建設技術研究所 上野弘道 |
| 11:00-11:30 | 地震災害を観る
京都大学防災研究所 岩田知孝 |
| 11:30-12:00 | 大気災害を観る
京都大学防災研究所 石川裕彦 |
| 12:00-13:30 | 昼食 |
| 13:30-14:00 | 火山災害を観る
静岡大学 小山真人 |
| 14:00-14:30 | 水災害を観る
近畿地方建設局 森川一郎 |
| 14:30-15:00 | 災害情報の拡がりを観る
群馬大学 片田敏孝・日本工営 石橋晃睦 |
| 15:00-15:30 | 休憩 |

- 15:30-16:30 リモートセンシングで災害を観る
理化学研究所地震防災フロンティア研究センター
- 16:30-17:00 西宮 Build Environment Database の構築
理化学研究所地震防災フロンティア研究センター 牧紀男
- 17:30- 交流会

2000年3月8日(火)

- 09:30-10:00 災害図上訓練(DIG)の開発
防衛庁防衛研究所 小村隆史
- 10:00-10:30 防災環境マップの作成
世田谷区 野徳浩保
- 10:30-11:00 こうべ防災ネットの構築
神戸市市民局 飯田晴彦
- 11:00-11:30 防災ピクトグラム応用の
GK 京都 ト部兼慎
- 11:30-13:00 昼食
- 13:00-13:30 防災教育ソフトの現在
山口大学 瀧本浩一
- 13:30-14:00 パーチャルリアリティ技術による避難
シュミレーション
東京大学生産技術研究所 目黒公郎
- 14:00-15:30 災害の可視化に関する新しいうごき
- 14:00-14:20 災害対策室における DLP プロジェクト
(大型ディスプレイの活用について)
三菱電機(株) 関西支社 内藤 茂之
- 14:20-14:40 ビデオ映像からの立体形状復元
(株) オージス総研 松本 亮
- 14:40-15:00 防災分野における ITS の活用
関西 ITS 推進協議会 原田信一
- 15:00-15:30 3次元地図による防災情報視覚化システム
NTT データ 石川 裕治
- 15:30-16:00 休憩
- 16:00-17:00 パネルディスカッション
京都大学防災研究所 河田恵昭

6. データベース "SAIGAI"

6.1 背景

巨大災害研究センターでは、その前進である旧防災科学資料センターの設立当初より、国内における災害史資料の収集・解析を行い、これらの資料をもとに比較災害研究、防災・減災などに関する研究を実施してきた。これらの実績を踏まえて、昭和 57 年度よりデ

ータベース "SAIGAIKS" を構築し、旧防災科学資料センター所蔵の論文ならびに災害関連出版物を登録してきた。この "SAIGAIKS" は、平成元年度に科学研究費(研究成果公開促進費)の補助を受けて全国的な文献資料情報データベース "SAIGA" として拡充された。現在、本センターを中核として、全国各地資料センター(北海道大学・東北大学・埼玉大学・名古屋大学・九州大学)の協力のもとでその構築作業が継続されている。登録されているデータは、平成 12 年 4 月現在で約 7 万件に達している。文献検索に資するため、昭和 58 年に科学研究費・特別研究「自然災害」の補助を受けて「自然災害科学キーワード用語集」が刊行された。さらに平成 6 年には、キーワードの追加・体系化を行った改訂版が「自然災害科学キーワード用語・体系図集」が刊行された。

6.2 新データベースシステムの導入

データベース "SAIGAI" の検索サービスは、平成 2 年 3 月より京都大学大型計算機センターのデータベースへ移行しており、大学間ネットワーク(N1 システム)に加入している大学であれば、日本語端末を用いて資料の検索が可能であった。しかし、最近の情報通信環境の発展にともないワークステーションやパーソナルコンピュータを用いた検索が増えており、より直感的な検索システムの導入に対する要望が強くなっていった。すなわち、従来のコマンドを主体としたキャラクター・ユーザー・インターフェース(CUI)ではなく、web サービスなどを利用したより操作性の高いグラフィカル・ユーザー・インターフェース(GUI)による検索方法の実現が期待された。

このような要望を受け、平成 10 年度における巨大災害研究センターのホストコンピュータ更新では、グラフィックス処理能力の極めて高いシリコングラフィックス社製 Onyx2 を中心としたデータベースシステムを導入した。本システムでは、データベース・アプリケーションとして、多くの実績があるオラクル社製 Oracle を採用し、今後の CD-ROM や Video による災害関連の情報、また数値地図や統計資料などのデジタル情報への対応も配慮した。

新検索システムは WWW 上に構築されており、各ユーザーはパーソナルコンピュータなどの web ブラウザから自由にアクセスが可能となっている。検索方法についても改良を行い、キーワードおよびシソーラスを用いた検索を実現している。なお、データベース "SAIGAI" には、巨大災害研究センターのホームページ(<http://www.drs.dpri.kyoto-u.ac.jp>)からリンクがは

られている。また、導入当初は KUINS I のネットワーク上にサーバーが設置されていたため、回線混雑時には反応が遅いとの苦情もあった。しかし、現在は KUINS II のネットワークに移行が完了しており、混雑は緩和されている。

6.3 利用者からの要望と今後の展望

新システムへ完全移行して約 2 年が経過した。従来の CUI による検索システムも並行にサービスを行っているが、利用者のほとんどは web ブラウザを利用したアクセスに移行したと思われる。利用者の増加に伴い、新システムへの問い合わせも多数寄せられている。全体的には好意的なものが多く、グラフィカルに検索ができるため、直感的で分かりやすくなったという意見が多い。同時に以下のような要望も寄せられた。

- ・サーバーが高負荷になっており、アクセスに時間のかかる場合がある。
 - ・シソーラス検索とキーワード検索の連携が悪い。
 - ・所在情報に加えて、アブストラクトや画像情報も提供して欲しい。
- これらを今後の課題とし、より使いやすいデータベースシステムへ改良を行っていく予定である。

7. トルコと台湾の地震被害調査

両地震に関する現地調査を、当センターが中心となって次のように実施した。

7.1 トルコ・マルマラ地震災害調査

(1) 調査目的：災害発生から 2 ヶ月半を経過した時点で行われる今回の調査の目的は、災害発生後の緊急対応および救援活動に関する実態を明らかにし、冬季を迎える被災地の復興の現状把握と今後の展望を検討することである。

(2) 具体的調査項目案

1) 今回の震災でもっとも被害が大きかったギョルジュク市・アドバザリ市を中心とする被災地での被害調査を行う。

2) トルコ経済の心臓部を襲った災害からの経済復興の実態を調査する。
操業再開までの過程と経済活性化に向けた施策の策定を調べる。

3) 地震による被害の空間分布に関する広域調査を実施する。

EDM（理化学研究所地震防災フロンティア研究センター）で行った DMSP データ（米国の温度分布調査用衛星写真）による被災地推定の結果を現地調査でキャリブレーションを目的として。被災地から離れた地域での被害を調べる。

4) トルコの危機管理システムに関する調査を行う。

1993 年に制定された災害対応の調整委員会システムにもとづいて行われた今回の首相府を中心とした災害対応の実態を、軍とシビルディフェンスの役割分担、自治体の役割分担、学校の回復といった観点から調査する。

5) 国際援助の実態に関して調査を行う。

首相府のキリス氏を窓口とした日本からの継続的な支援の実態と今後のあり方について調査する。

6) 阪神・淡路大震災で得た教訓を提供する。

復興対策、生活復興、都市復興に関してトルコ政府関係者に助言し、現状を調査する。

(3) 調査日程

10 月 26 日 (火)	移動日
9:40	関西空港出発 KLM816
14:30	アムステルダム到着
19:10	アムステルダム出発
23:30	イスタンブール到着
	イスタンブール宿泊
10 月 27 日 (水)	イスタンブール
	イスタンブール商工会議所
	トルコトヨタ本社
	イスタンブール工科大学
	イスタンブール宿泊
10 月 28 日 (木)	イズミット・ギョルジュク
	石油精製施設火災現場
	イズミット市内現場
	ギョルジュクテント村
	イスタンブール宿泊
10 月 29 日 (金)	アドバザリ
	日本から移送された仮設住宅の設置現場 (サカエリ県)
	アドバザリ市内現場
	トルコトヨタ工場
	イスタンブール宿泊
10 月 30 日 (土)	イスタンブール
	資料整理
10 月 31 日 (日)	移動日
	広域的な被害分布の確認
	イスタンブールからアンカラへの陸路による 移動
	アンカラ宿泊
11 月 1 日 (月)	アンカラ
	首相府
	危機管理委員会
	アンカラ宿泊
11 月 2 日 (火)	アンカラ
	公共事業住宅省防災局
	内務省統計局
	アンカラ宿泊

11月3日(水) アンカラ

セミナー開催

アンカラ宿泊

11月6日(土) 帰国

● 調査団の構成員

団長 河田恵昭 京都大学防災研究所巨大災害研究センター センター長・教授

団員 林 春男 京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授

今村文彦 東北大学工学部災害制御センター (30日まで同行)
(京都大学防災研究所客員助教授)

田中 聡 京都大学防災研究所 助手

高島正典 京都大学大学院情報学研究科博士課程 1 年生

中川 大* 京都大学大学院工学研究科助教授

能島暢呂* 岐阜大学工学部土木工学科助教授

高木真志* 中央復建コンサルタンツ計画設計部係長

菅井道世** 国際連合地域開発センター神戸事務所 研究員

百々敦浩** 国際連合地域開発センター神戸事務所 研究員

岩崎 敬 東京大学先端科学技術センター客員教授

青木正幸 東京海上リスクコンサルティング第一事業部副主任研究員

瀬川 里志*** 兵庫県商工部産業政策課係長

濱田 士郎*** 兵庫県土木部街路課課長補佐兼改良係長

中村 重幸*** 兵庫県教育委員会事務局総務課指導主事

以上 15 名 (* : 土木学会第二次調査団, ** : 国際連合調査団, *** 兵庫県)

7.2 台湾・集集地震調査

(1) 調査目的 : 地震発生から 2 か月弱経過し、被災現場が落ち着きを取り戻してきているので、この機会に地震特性に関する地球科学的知見のみならず、社会的、行政的な視点から現地の災害対応の状況について、関係者のヒアリングを実施するとともに、台湾成功大学防災研究センターとの今後の共同研究推進の枠組みを合意する。

(2) 具体的調査項目

1) 救命救急体制, 2) 外国からの援助の受け入れ, 3) 経済被害の概要, 4) 復旧・復興計画, 5) 生活再建策, 6) 産業復興策, 7) 災害・防災報道

(3) 調査日程

12 月 9 日(木) 台南にて調査打ち合わせ

12 月 10 日(金) 台中と周辺被災地

被害調査 (社会インフラ全般、住宅、ダム、橋梁、道路、活断層、山体崩壊)

12 月 11 日(土) 防災関係者のヒアリング

(政府、地方行政、防災関係者)

12 月 12 日(日) 台湾成功大学防災センターにて現地

報告及び阪神・淡路大震災の検証報告、今後の共同研究の打ち合わせ

(3) 調査団の構成員

団長 河田恵昭 京都大学防災研究所巨大災害研究センター センター長・教授

団員 柄谷友香 京都大学大学院工学研究科博士課程 3 年生

斉藤宏保 NHK 解説員

本庄光夫 NHK 近畿メディアプラン

黒田兆次 建設技術研究所

森岡千穂 建設技術研究所

なお、両調査結果は、「巨大災害研究センター報告 3」として現在、印刷中である。

Information Analysis in the Field of Natural Disaster Science (27)

**Yoshiaki KAWATA, Takeyoshi TANAKA, Haruo HAYASHI, Akio KITAHARA
and Tomoyuki TAKAHASHI**

Synopsis

The objectives of this paper are to introduce the activities of the Research Center for Disaster Reduction Systems. They are systematically managed by not only our staff members but also many volunteers who usually belong some committees. Open symposium are held monthly and many graduate students attended every time. The 5th Seminar for Regional Disaster Prevention Plan was held to contribute loss reduction managed by local government officers. Year 2000 is the 5th year anniversary of the great Hanshin-Awaji earthquake disaster so that we had Memorial Conference in Tokyo and also in Kobe V. In the former case, six slots in two days were presented with own scenario. The topics of the scene was recorded by video and after that we distributed to disaster related organizations such as the Board of Education and Land Agency and the Fire Defense Agency. The composition written by disaster-experienced aged-people in Kobe area was kept permanently at the Hanshin-Awaji Memorial Center (tentative name) which will be established in April, 2002. The 2nd forum of Visualization of Disasters in every two years was held to use advanced technology of understanding of disaster processes. Other activities such as Research Association of Tokai, To-Nankai and Nankai Earthquake Tsunami and field survey on emergency response and behavior of decision making in any organizations were also conducted.

Keywords : database, disaster reduction studies, catastrophic disaster, Turkey-Kocaeli Earthquake(1999), Taiwan Chi-chi Earthquake(1999)